

モノをめぐる渋沢敬三の構想力

—— 経済と文化をつなぐもの ——

In the Creative Imagination about the Thing of Keizou Sibusawa, How Did the Thing Think
Economy and Culture to be Able to be Tied?

原田 健一
HARADA Kenichi

要旨：渋沢敬三は、渋沢栄一の孫として、渋沢財閥の後継者となり実業家として活躍したが、一方で、自ら研究グループを組織し民族学、民俗学、漁業史などの研究をおこない、また、偉大なるパトロンとして多くの研究者の援助もおこなった。渋沢敬三は、財界と研究の世界をつなぐ立場にあり、社会的な役割は重なっていた。そのため、その視角は輻輳化され、ハイブリッド化されており、モノである民具、生活用具などが表す文化の様相を捉えるときも、経済、流通などの側面から、社会の基底から物と人とが移動していく様態から捉えようとした。

ここでは、そうした渋沢敬三の独特な立場と、そこからもたらされた研究視角の意味について、日本実業史博物館（以下、「実博」とする）の資料、ならびに実博の構想から生まれた渋沢敬三の編著『明治文化史』の『生活編』と『社会・経済編』から考察する。

これらの資料と編著が扱う時期は、幕末から明治へかけての「画期的な変化」の時期であり、欧米諸国との関係だけでなく、アジア諸国と新たな関係が構築されることで、日本の近代化がなされた時期でもあった。渋沢はそうした関係性を捉え、物をめぐる生産、流通が、諸外国との関係のなかでいかに再編、構築されていたかを示し、さらに日常生活のなかで、これらの物がいかに消費され、常民の意識が近代化されたのかを捉えようとした。

同じ時期を扱った、柳田国男の『明治大正史 世相篇』、ならびに『明治文化史 風俗編』と比較すると、柳田は、明らかに日本という固有の地域の視点から生活の中の言葉や感覚を手がかりにし、日本人の心的世界を分析、捉えようとしており、柳田と渋沢の捉え方は大きくことなっている。しかしながら、その提示されたビジョンは重なる部分と重ならない部分を含みつつも、常民の現実の様相を捉えている。

▶キーワード 日本実業史博物館 流通 幕末から明治期 常民 柳田国男

1 渋沢敬三の仕事

渋沢敬三は、渋沢栄一の孫として、渋沢財閥の後継者となり実業家として活躍したが、その一方で、自ら研究グループを組織し民族学、民俗学、漁業史などの研究をおこない、また、さらに、偉大なるパトロンとして多くの研究者の援助もおこなった。そして、そうした営為の過程で、日本の学知の形成に、広範囲で、しかも大きな影響を与えた。

ここでは、そうした渋沢敬三の独特な立場と、そこからもたらされた研究視角の意味について、これまであまり研究されてこなかった、日本実業史博物館（以下、「実博」とする）の資料や渋沢敬三の編著から考察することを目的とする。なお、実博については、2006

～2008年にかけておこなわれた人間文化研究機構総合推進事業連携研究—文化資源の高度活用「『日本実業史博物館』資料の高度活用」(研究代表者・青木睦)の調査の知見に基づいている。

まず、最初に渋沢敬三の生涯を概観し、その仕事を整理し、大きく分けると、以下の6つになる。

1つに、実業家としての側面である。渋沢栄一の後継者として、政財界の要として、第一銀行、日本銀行、大蔵大臣を歴任し、戦後は、日本経済の復興のためのさまざまな経済団体の要職を歴任した。

2つに、祖父渋沢栄一の顕彰とともに、日本の実業史の検証を試みようとし、日本実業史博物館を構想し、資料収集の方針、ならびに指示をおこなった。

3つに、生涯、旅をしつづけたことである。公人として、あるいは、私人として、なにより旅することを望み、日本のみならず、世界各地を見て歩いた。その旅は、生涯のさまざまな政治的社会的状況のなかで、時に、財界人として日本社会の視察となり、また、世界経済とのパイプ役としての役割を果たし、時に、研究者として民俗採訪の旅となり、また、それを映像で記録することで、映像メディアに深くかかわった。

4つに、アチック・ミュージアム(のち日本常民文化研究所)という民間研究所の主催者として、アカデミズムにとらわれない自由な発想で、マテリアル・カルチャーとしての民具研究や、絵巻ものの絵引きなど、多くの同人とともに研究をおこなった。

5つに、漁業水産関係の文献の収集をおこない、基礎的な研究をするだけでなく、特に近代以前の漁業の研究を推進した。

6つに、さまざまな領域の研究者を援助し、また、多くの共同研究の支援をし、研究組織の立ち上げに貢献した。

2 日本実業史博物館の企画、構想

ここで、渋沢敬三の仕事として今まであまり触れられることのなかった、2つめの実博の仕事から、渋沢敬三の研究のあり方、立場についてみてみたい。

既に行われた実博の資料調査によれば、実博は、渋沢栄一が、1931年11月11日に死去した後、渋沢栄一の事蹟を記念するものとして、渋沢栄一郎の寄贈を受けた渋沢記念財団竜門社が、渋沢子爵家を栄一より継承した嫡孫渋沢敬三を含む委員会に検討を委託し、1937年7月に建設を決定した博物館である。

建設決定以後、着々と展示資料の購入など、開館にむけた準備が進められ、1939年5月13日の渋沢栄一生誕記念祭には建設地鎮祭もおこなわれた。しかしながら、1944年7月に、戦争状況の悪化などの諸情勢により、非開館の決定がなされる。収集された18,707件、約4万点の資料は、敗戦後、1951年文部省史料館に寄託され、1962年には寄贈され、公開されることになる。

現在、収集された実博の資料は、国文学研究資料館において、再整理がすすめられ、①博物館準備室アーカイブズ、②絵画、③写真、④番付、⑤地図、⑥古紙幣、⑦竹森文庫、⑧文書・書籍、⑨広告、⑩器物資料の10に分けられている。⁽¹⁾

①博物館準備室アーカイブズには、委員会において検討された実博の構想案であり、ま

た、設立計画書にもなった、1937年に渋沢敬三によって執筆された文書「一つの提案」が残されている。それによれば、渋沢敬三は、「我国民中最多数を占める常民の基礎文化」を展示する「日本民族博物館の建設」が緊要の課題としてあるとしつつも、渋沢栄一の一生に因み、その内、経済的部門を独立させた「幕末から明治へかけての我々国民にとって最も異常なる画期的な変化を如実に示すべき博物館」である「近世経済史博物館」を建設したいとした。

具体的には、渋沢栄一の生涯とその仕事、思想がわかるものとしての「渋沢青淵翁記念室」、また我が国民全般の見地から近世経済史を展覧する「近世経済史展覧室」、貴賤貧富を問わず経済文化の発展に貢献した人物の肖像をおさめる「肖像室」を設けるとした。

この「一つの提案」には、さらに、組織、本館の内容、本館建設案、予算案、標本の収集、展覧原則、展覧予想が書かれており、明確なヴィジョンとプランが示されている。また、展覧原則として、「史的発展の過程及系統に留意すること」などの6つの原則が示されている。さらに、展覧予想として、「(一) 原始産業、(二) 基礎産業、(三) 補助産業、(四) 上記以外ノ実物又ハ写真、模型ヲ以テ変遷状態其他ヲ示スモノ、(五) 図表」とあり、各項目について細かく展示内容が示されている。⁽²⁾

ところで、この提案の中心となっている「近世経済史展覧室」の「近世」とは、渋沢栄一より少し前の「文化文政ヨリ維新ヲ経テ明治末期ニ至ル」「画期的変化ノアリシ時代」を指し、その時期の「変遷及ビ発展過程」において、「基礎的ト考ヘラル、モノ竝ビニ特ニ商業史的ニ重要性アルモノ」を陳列するとした。また、「軍事外交政治学術芸術宗教、貴族文化、常民基礎文化の大部分」ならびに「近代工業」は除くとしており、(一) 原始産業、ならびに、(二) 基礎産業の重工業の部分を除いた部門、つまり、商業、流通に関連したものを中心に構想していたことが分かる。

現在、収集された資料はデータベース化され、国文学研究資料館で閲覧することが可能になっているが、再整理された分類に従ってみれば、②絵画は文化文政以降から明治にかけての錦絵を中心とし、美学的なものというより、現実の風物、世相を実写したものが多く収集されており、展示用の図表といえる。③写真は、「肖像室」で使われるものと考えられる肖像写真が多く収蔵されている。⑦竹森文庫、⑧文書・書籍は、経済全般に関係した書籍と資料である。しかし、それ以外の、④番付、⑤地図、⑥古紙幣、⑨広告は、明らかに商業、流通に関係するものといってよく、また、⑩器物資料の大半も分銅、印象、鑑札、看板など商業に関連する道具類が多い。つまり、10の内半分以上が、商業、流通に関連したもの、つまり、近世経済史展覧室に関連するものであることが分かる。

3 日本実業史博物館における資料収集の過程のなかで

①の「博物館準備室アーカイブズ」には、実博の資料収集の過程を明らかにする「購入品原簿」と「準備室日記」が残されている。すでに、それらの資料の分析から、実博の資料収集において、渋沢敬三が土屋喬雄、樋畑雪湖、樋畑武雄、遠田武などの数人のブレーンとともに、直接、収集の指示をし、その収集された資料をみて購入の可否などの決定をおこなっていること、また、実際の収集活動には、甲州文庫攻力亀内、粹古堂伊藤敬次郎、うさぎや書店、木内書店などがあたっていたことが明らかにされている。⁽³⁾

この資料収集の決定において、1931年に『渋沢栄一伝』（改造社）を刊行し、大内兵衛と共編で『明治前期財政経済史料集成』全21巻（改造社、1931~1936年）などの資料を刊行していた土屋喬雄が主導的な立場を果たしていただろうことは間違いない。しかしながら、渋沢敬三にとって、実博のこうした体制は、アチック・ミュージアムが大勢の同人による、同人個々の研究的な興味を発展させる方向で、その調査、資料収集をしてきたことと大きく異なっていることもみえる。

渋沢敬三は、自分は一実業家であって、研究者ではないとし、「論文を書くのではない、資料を学界に提供する」⁽⁴⁾のだとし、また、「理論づける前にまず総てのものの実体を掴むということが大変大切」⁽⁵⁾だとして、多くの資料集を編纂、刊行することに徹し、研究環境の整備に多くの時間を費やした。この言は、確かに、アチック・ミュージアムや漁業史の研究において、その通りである。

しかしながら、実博において、渋沢敬三は、アチック・ミュージアムや漁業史の研究活動のさまざまな経験をいかして、実博の企画、構想を立ち上げ、しかも、その自ら提出したモチーフとテーマにそって、つまりターゲットを絞った資料収集をすることができた。

実業家であった祖父渋沢栄一は「道德経済合一説」をとらえ、人間の経済行為を利益追求のための行為としてだけではなく、広く人と人との関係性をつくりだしていく社会的な活動としてあるとし、そこに倫理を社会化していく契機をみようとし、また、そうした実践として晩年は積極的に社会事業にも関わった。渋沢敬三は、渋沢財閥の後継者として、そうした祖父栄一の理念を受けつぎ、また、そうした祖父栄一の営為を、研究という知の厚みを通して対象化することができる位置にいた。それは、通常の財界人と違うものであった。

しかし、もう一方で、渋沢敬三は、第一銀行、あるいは日本銀行に関わった実業家としての経験から実感として、その内容について理解し、その理解を資料の収集に反映できた。それは、実博の仕事と一緒に過ごした研究者である土屋喬雄とも違った立場であった。

渋沢敬三は、財界と研究の世界をつないでおり、その視角はハイブリッドなものであった。実博が、単なる渋沢栄一記念館でなかったことは重要である。渋沢栄一を幕末から明治の「画期的な変化」の時代を生きた一人の人間として、何を思い、何をしようとしたのか、社会全体のなかで捉えようとし、「近世経済史展観室」を置くことを構想した。

しかも、実博の構想の背景には、渋沢栄一の後継者として、その理念の継承だけでなく、アチックや漁業史の研究を通して、明らかにしてきた常民文化への思いも練り込まれている。それは、名もない深谷の血洗島の百姓であった栄一を、日本資本主義の指導者へと導いた文化の力でもあったからだ。ここでは、詳しく論じないが、渋沢敬三の多彩な映像の原基に、渋沢栄一を血洗島の一農民として撮りたいという欲求と、父篤二が切り開いた渋沢倉庫という物流を扱った会社をフィールドとした映像の蓄積があったことは重要である。⁽⁶⁾

どちらにしても、実博に関わろうとする渋沢敬三の立場には、渋沢栄一の後継者として、実業家として、また、研究者としてもあるという、3つの異なった社会的役割が重なっており、その構想も、また輻輳化されている。

4 『明治文化史 社会・経済編』について

実博は、「一つの提案」に書かれているように、「幕末から明治へかけての我々国民にとって最も異常なる画期的な変化」を明らかにすべく、「近世経済史ノ各部門ニ亘リ変遷及ビ発展過程、ソノ程度、ソノ方向、接触文化ニ依ル変移ノ度合又ハソノ反動等」について明らかにすることが方針となっている。

ところで、洪沢敬三は、1955年に開国百年記念文化事業会委員として、『明治文化史』の『生活編』と『社会・経済編』の二書を、編纂し、刊行している。この二書は、日本常民文化研究所の関係者を動員して、明治時代における社会経済のめざましい発展の過程をたどり、明治文化の基礎条件を明らかにしようとするものであった。内容的にみて、明らかに実博の構想と重なる。また、洪沢敬三は、同人の研究を再構成し、単なる分担執筆ではない、全体としての統一性をもった著作として構想し、著書といってよい内容にまとめている。

まず、『社会・経済編』の章構成と章担当者をみると、第1章 幕末の開国とその影響（山口和雄）、第2章 社会事情の変遷（大久保利謙）、第3章 経済政策の推移・発展（土屋喬雄）、第4章 金融制度の発達（加藤俊彦）、第5章 軽工業の発達（楫西光速）、第6章 重工業の発達（安藤良雄）、第7章 鉱山業の発達（安藤良雄）、第8章 交通通信業の発達（楫西）、第9章 農業および水産業の発達（第1～4節山口、第5節羽原又吉）、第10章 貿易の発達（加藤）、明治社会経済史年表（楫西）となっている。

幕末から明治末にかけて、近代的産業技術や経済制度の移植が、どのようにわが国の社会経済を変化させたか、社会経済史的な観点とその枠組みを示している。内容的にも、展覧予想としてあげられていた、「(一) 原始産業、(二) 基礎産業、(三) 補助産業」の領域全体について「史的発展の過程及系統に留意」した記述といえよう。ここで、必要な範囲で、その概要を述べる。

幕末、開国によって、封建時代にあった日本は、産業革命を経た近代産業資本を中心とする欧米諸国の国際通商網に取り込まれ、それまでの鎖国の管理された貿易から、直接的な国を越えモノが流通する世界市場に組み込まれた。当初の輸出品は生糸、茶といった原料品が大部分を占め、輸入品は毛織物、綿製品、砂糖などの資本制大工業の生産品が中心となり、輸入全体が輸出総額を大きく上まわった。この急激で不均衡な貿易によって、それまでの統制されていた日本の商品流通機構は解体され、さらに、生産機構の変化が促進された。当然のことながら、輸出品の生産技術は改善され、経営形態が進化し、生産高が増大する一方で、輸入された綿製品や砂糖などの国内の商業的農業、手工業は打撃を受けた。さらに、金貨流出にともなう幣制、金融の混乱とかさなり、物価は急騰し、農民層の分解を促進させ、社会不安の拡大をまねき、封建社会の解体を導くことになった。

明治政府は、こうした貿易の不均衡、関税自主権をもたない不平等条約という状況下、日本の独立を確保し、発展させるためにも、近代的な資本主義的生産方法の輸入、移植をおこなう必要があった。具体的には新しい機械と技術を輸入し、生産力を高め、さらに、低賃金で対抗するという産業政策である。保護関税を設けることができない以上、産業育成策はそのまま貿易政策となるものであった。

しかし、当初の上からの産業育成策である殖産興業は必ずしも効率的ではなく、官営工

場の払い下げを契機に、官業から民富を求める方向へと変わる。これに、松方正義による紙幣整理、インフレーションの克服を目指した低物価政策、さらには機械産業の助長策などが実施され、1880年代には、産業の近代化が進み、輸出超過へと転換することになる。

1890年代に入り、日清戦争（1894～1895年）をむかえ、綿業、絹業などの軽工業が進展し、金融制度の確立、運輸交通業の発展などとあいまって、全体的に日本の資本主義は確立する。さらに、1900年代には、日露戦争（1904～1905年）をはさみ重工業が発達し、本格的な資本主義生産が展開することになる。

これを貿易構成の変化からみると、1890年代において、輸出は幕末以来の生糸が引き続き第一位を占めたが、第二位であった茶は転落し、綿糸や絹織物などが台頭することになる。また、輸入は幕末において毛織物や綿製品などが重要な地位にあったのに対し、綿花や麻などの工業原料品が拡大する。1900年代に入ると、さらにその傾向は進み、輸出において工業生産品は拡大し、輸入において工業製品は減少し、原料品の増大が続くことになる。

この貿易構成の変化は、市場の変化と連動しており、1890年代に入ると、輸出先としてアジア貿易が拡大する。つまり、紡績業の発達とともに綿糸、メリヤス、綿織物などの輸出先として、アジアが重要な位置をしめることになったのだ。さらに、日露戦争後の朝鮮、中国への支配権の拡大とともに、中国市場への輸出が増大する。一方、輸入においては、欧米市場は大きな位置をしめ続けた。重工業を展開するために、鉄などの原料や機械及びその部品などの生産手段を、輸入し続ける必要があった。つまり、それは、先進国である欧米には、生糸やその他の原料品を輸出し、生産手段や原料を輸入する立場を保持しつつ、一方で、後進国であるアジアには工業製品を輸出することで、近代工業を発達させていた。明らかに、貿易政策、ならびに産業政策は、帝国主義的な政策と不可分のものとしてあった。⁽⁷⁾

こうした幕末から明治末にいたる「画期的な変化」ともいうべき社会的文脈のなかで、渋沢栄一は、尊皇攘夷から開国へ、さらには官から民へと転身し、日本の近代的金融・信用制度を成立させる過程において、あるいは、株式会社による近代企業を設立することにおいて、指導的な役割を果たした。渋沢栄一の営為は、国家の政策と不可分な関係にあり、あるいは、関係があることで社会的な成功を勝ち得ることができた。

実現することのなかった実博の展観内容について、知ることは難しいが、日本実業史の展開、つまりは、日本の近代化は、諸外国、欧米だけでなく、アジア諸国との関係性のなかで成り立っていたことに、渋沢敬三は、土屋喬雄らの研究の厚みを通して、自覚していたことは間違いないだろう。

5 伊勢辰コレクションからみた実博

こうした渋沢敬三の姿勢、あるいはそれが反映した実博資料のあり方をあらわすものとして、伊勢辰に命じて集められた紙のコレクションは、モノと流通、そしてそれに関わる人びとのあり方をあらわす事例として興味深いものがある。この伊勢辰コレクションは、1939年10月5日に購入されており、収集にあたったのは、三代目伊勢辰、広瀬菊雄である。⁽⁸⁾三代目は、錦絵の収集家として著名であるだけでなく、石井研堂と『錦絵改印の考証』『地

本錦絵問屋譜』(1920年)などを出版しており、江戸の文化を継承する文人であった。しかし、一方で、伊勢辰は、積極的に千代紙や、ナプキン、玩具などさまざまな紙製品を海外に輸出していた。このコレクションは、そうした伊勢辰のあり方を反映している。

伊勢辰を始めた初代広瀬辰五郎は、1832年、千葉県下総国千葉郡鷺沼村に生まれ、12歳のとき錦絵などの版元であった江戸の伊勢惣に奉公し、1858年、27歳で独立して店をもつことになる。初代は、江戸から明治へと変わる激動期に、多くの名門の版元や錦絵商、千代紙屋が潰れていくなかで、外国人向けの錦絵や千代紙を出版して成功することになる。⁽⁹⁾

初代は、外国人の求めている趣向や用途を知り、流行錦絵や千代紙の色調を変えたり、自ら下絵を描き、組んだり、掛物に仕立てたりなどの工夫をした。またそれだけでなく、現在においてはランチョンマットというべき新しい商品をつくったり、新たな揉み紙を開発したりと、さまざまなことを試みたのである。1892年には、現在の貨幣価値で考えれば、2億円に近い売り上げを得ていたという。⁽¹⁰⁾

こうした事例は、国家的な政策と少し離れたところで、旧来の産業体制や、商品流通機構が解体するすき間をぬって、手工業的な商人が自らの創意工夫によって、新たな商品や市場を開拓していたことを示すものでもある。

三代目伊勢辰は、こうした事業を受けつぎ、得た収入をもとに浮世絵の初摺りを買収し、江戸文化を保存し、継承するだけでなく、多くの板木を買入れ、事業として木版摺りの高級品を手がけ、江戸伝承の手摺りの印刷技術を自ら継承することになる。千代紙という伝統的な工芸物に着目したとき、千代紙が媒介する経済関係は、そのまま国際的な経済活動になることで生き続け、それは同時に異国との文化交流となり、江戸から明治へと移る文化の継承へと関わることになる。江戸文化の伝統は、国を越える新たな流通経路を獲得することで、モノに新しい価値を付け加え、生き延びていたのである。

6 『明治文化史 生活編』について

ところで、『明治文化史 生活編』は、欧米の物質文化の導入によって、基層文化をなす衣食住の生活がいかに変化したかを究明し、主として一般の人びとの消費面をとりあげたものである。つまり、『社会・経済編』が示す生産、流通の近代的な先端的な部分から、日常生活の中で実際に消費する常民の意識の部分へと局面を拡大、転換したものと見える。

渋沢敬三は、内容的に相互補完しあう『社会・経済編』と『生活編』の執筆者とで、定期的な研究会を開き研究成果の交換をしたが、「画期的な成果をもたらすものではなかった」⁽¹¹⁾と記している。また、『生活編』のあとがきで、「アチック同人諸君の今までの関心は、近代において次第に湮滅・解体・変質する伝統的なものの方に偏っていた」⁽¹²⁾と興味深い不満も明らかにしている。

渋沢敬三が関わったアチック・ミュージアムの研究や、水産史研究室の漁業関係の研究を概観したとき、その奥底に、社会の基底をささえる普通の人びとである常民と、その文化に対する渋沢敬三の信頼と興味があったことは多くの論者が指摘している。

ところで、通常、常民、あるいは常民文化の捉え方は、伝統や規範、しきたり、習俗、慣習などの局面が強調され、人びとは相対的に固定的な広義の規範意識の中で日常生活を営み続けるものとされる。したがって、その心情も意識も精神構造も変化しにくいとき

れ、生活や意識のさまざまな局面に、規範化された内面や価値、心性の古層といったものがクローズ・アップされることが多い。

そうした常民へのアプローチに対して、渋沢敬三は、衣食住を支えるマテリアルなものを通して、日常生活の見方や、常民文化のあり方全体を捉えようとした。日常生活を支える衣食住のさまざまなモノは、日常性や生活様式を支えるだけでなく、同時に日常生活の美的な感覚を形成する文化としての側面ももつ。また、近代に入り、産業の発展によって、各地域、個人でつくられていたさまざまなモノは、工場生産された商品に変えられ、経済というシステムに組み込まれ、社会に広範囲に循環することになる。

渋沢敬三は、社会の基層を形成する、日常生活用品や生産用具などのモノについて、すでに漁業史、あるいは漁具などの研究の知見から「一見原始的生産に伴う技術の渋滞性はありながらも個々については不断の努力が払われていることが想像以上盛んであること、更に技術の進歩がある時その伝播が意外に速やかにかつ広範囲にわたって見られる」⁽¹³⁾とされている。常民文化は、大きな時間の流れの中で、ゆるやかに、そして時に外との関係から変化している様相が見られると考えていた。

渋沢敬三にとって、常民は、固定性や停滞性、あるいは消えゆく衰滅する文化を保持するものとしてあったのではなかった。常民のもつ、変化に呼応し、新しい文化を受容し、創造しようとする、さまざまな創意工夫や、さまざまな外との関係性が、モノからみえてくると考えていた。つまり、モノを消費的なものとしてみるだけではなく、新たな技術や、創意工夫を含んだ人と人とを媒介するコミュニケーションのツールとして、固定的なものと流動的なものが重層化した複合的なつながり目として捉えていた。渋沢敬三は、変化によって、消滅し、忘れ去っていくモノに対して深い愛惜の念をもつと同時に、新たなものを生み出そうとして現れるモノの微細な差違に、最後まで眼をこらそうとした。こうしたスタンスは、研究から生み出されたというより、実業家として社会に実践的にかかわってきた経験から培われた姿勢といってよい。そこに、アチックの同人と、小さな齟齬を生じさせた。

7 『明治文化史 生活編』と『風俗編』

『明治文化史』には、渋沢敬三が編集委員となっている『生活編』があると同時に、柳田国男が編集委員となっている『風俗編』がある。両編は、互いに近接しているだけでなく、領域も重なっている部分が多い。まず、最初に、両書の章立て、執筆者をみておく。『生活編』は、第1章 序説（有賀喜左衛門）、第2章 衣服と生活（遠藤武）、第3章 飲食と生活（宮本常一）、第4章 住居と生活（宮本馨太郎）、第5章 交通と生活（桜田勝徳）、第6章 家庭生活（有賀）、第7章 新しい集団生活（宇野脩平）、第8章 都市と農村（竹内利美）、明治生活史年表（桜田）である。執筆者は、既に述べたように、アチックの同人である。

一方、『風俗編』は、第1章 総説（柳田国男）、第2章 衣・食・住（直江広治）、第3章 村と町（和歌森太郎）、第4章 家（和歌森）、第5章 旅（和歌森）、第6章 婚姻（直江）、第7章 葬式（直江）、第8章 子どもの生活（萩原竜夫）、第9章 青年の生活（萩原）、第10章 婦人の生活（萩原）、第11章 年中行事（大藤時彦）、第12章 消費生活（大藤）、第13

章 信仰生活（大藤）、第14章 言語生活（柳田）、明治風俗史年表（西垣晴次）であった。執筆者は、民俗学研究所に関係している研究者である。

ところで、柳田は『風俗編』第1章の総説で、「風俗」という言葉で指している内容は、今日の言葉でいえば、「民俗」であると断っている。その言の通り、『風俗編』の構成は、1950年代に達成された民俗学の範囲をほぼおさえた内容となっている。さらに、柳田は、明治時代を「封建的な社会制度から、資本主義的自由競争への飛躍の時代であった」と「画期的な変化」の時期であったことを認め、振り返り、「こういう変化のある時期の方が、むしろ昔からあるものが目立ってくる」⁽¹⁴⁾とし、文化の変わらぬ部分、持続するものに自分の研究の重点があることを率直に述べている。アチック同人と相似た姿勢といえるが、渋沢との視角の違いは明らかともいえる。

具体的な違いについて、見ていく必要があるが、『風俗編』において、「とくに生活編との重複を極力避け」⁽¹⁵⁾た結果であろう、衣食住の部分が1章分に縮小されているので、ここでは、まず、『風俗編』が前提としている柳田国男が1930年に刊行した『明治大正史 世相篇』（朝日新聞社）をもとに、比較分析する。

なお、『明治大正史 世相篇』は新聞記事をもとにしているが、その資料の蒐集とまとめに桜田勝徳が重要な役割を果たしている。一方、『明治文化史 生活編』においても、最後に、全章にわたって手を入れ、まとめる役割を桜田がおこなっている。桜田というまとめ役を介し、柳田と渋沢の方法やアプローチの違いが、より明確なものとなるだろう。

8 『明治大正史 世相篇』と比較して

最初に、『明治大正史 世相篇』の章立てをみておく。自序、第1章 眼に映ずる世相、第2章 食物の個人自由、第3章 家と住心地、第4章 風光推移、第5章 故郷異郷、第6章 新交通と文化輸送者、第7章 酒、第8章 恋愛技術の消長、第9章 家永続の願い、第10章 生産と商業、第11章 労力の配賦、第12章 貧と病、第13章 伴を慕う心、第14章 群を抜く力、第15章 生活改善の目標、となる。

ここでは、まず衣服について見てみる。『生活編』第2章「衣服と生活」（遠藤武）で、木綿が明治の初めには全国的に普及していたとし、「これは木綿が麻よりも績むぎやすく、保温が麻よりも優れ、しかも丈夫さにかけては大差なかったためである。そのうえ幕末から明治にかけての輸入量は内地生産高を凌駕し、その一斤の価格は一八七四年（明治七年）外綿が二十九円六十六銭に対し、内地綿が四十二円七十銭、これを明治十一年の価格で見ると外綿二十六円八十六銭に対し、内地綿四十五円という具合で、価格もまた外綿の方が非常に安かった。安価な外綿の輸入は木綿着物を普及させると同時に綿糸工業を勃興させることにもなり、一八六七年（慶応三年）島津藩の鹿兒島紡績所、一八七〇年（明治三年）には泉州堺に堺紡績、五年には鹿島万平の個人経営にかかる鹿島紡績が武州飛鳥山麓に建設され、一八八三年（明治十六年）には大資本による大阪紡績も設立されて、二十年には全国の紡績工場十九、三十年には七十四、四十年には百十八の多きに及んだ、これらの外綿は二十六年頃迄は中国、三十年頃まではインド、以後アメリカやエジプトより輸入されたのであった。」⁽¹⁶⁾と、具体的な数字をあげ、原料である綿と生産物である綿織物とを分けて、外国との貿易のなかで、推移している状況を描いている。明らかに、『社会・経済編』

に呼応する記述とあってよい。

それに対して、『世相篇』では、第1章「眼に映ずる世相」において、自然における豊かな色彩を述べつつ、江戸時代後半になってから、綿が麻に変わって積極的に使われはじめた原因が、「紡織技工の進歩よりも、是も亦染色界の新展開にあつた。葉藍耕作の最初の起りは不明であるが、少なくとも是が実用には専門の紺屋が予期せられて居た。(略)これ以外にも鬱金とか桃色とか、木綿で無くては染められぬ新らしい色が、やはり同じ頃から日本の大衆を悦ばせ出した」とし、衣服における染料の問題から入り、近代にはいつて、自由に色遣いが可能になったしだいを述べる。そして、こうした人びとの色彩感覚に触れるだけでなく、さらに、肌に麻を着けることで、「肌膚が之に由つて丈夫になることも請合だが、其代りには感覚は粗々しかつたわけである。ところが木綿のふつくりとした、少しは湿っぽい暖かみで、身を包むことが普通になつたのである。是が我々の健康なり又気持なりに、何の影響をも与へないで居られた道理は無いのである。日本の若い男女が物事に感じ易く、さうして又一様に敏活であるのも、或は近世になつて体験した木綿の感化では無いかと、私たちは考へて居るのである」⁽¹⁷⁾と、麻から木綿へと衣服が移る、あるいは近代に入って、毛織りものであるメリンスの経験を通して、着心地や肌触りが変わっていくことを説きほどいていく。

『生活編』では、木綿が麻よりも「績むぎやすく、保温が麻よりも優れ」ているという実利的な指摘をしているのに対して、『世相篇』は「木綿のふつくりとした、少しは湿っぽい暖かみ」と、モノを通しながら、見る、触れるなどといった人びとの感覚へとおもむいている。

柳田のこうした姿勢は、第3章「家と住心地」においてもかわらない。柳田は、かつて家には、大きく念入りのものと、粗末なものが二つあったとし、後者の小さな仮住まいがしだいに、住居として、明かり障子から板ガラスへ、夜の行燈からランプへと変わるさまを述べ、そこから、女性の火の管理へと触れ、家としての住心地を得ていく過程を巧みに描く。柳田はさまざまな日常生活の器物を扱いながら、それを使用する人間の五感の変遷を説き、さらに人びとの心的な世界へと入っていく。第9章「家永続の願い」では、祖霊信仰へと説きおよび、人びとが自ら魂のゆくえを定めようとし、家の永続を願うありさまを浮き彫りにする。

こうしてみると、渋沢がモノを見ていく眼は、柳田よりはるかに即物的であり、物をとおした人びとの感覚より、物と物との交換や流通、あるいは、制度にむいている。『生活編』第2章「衣服と生活」では、従来の坐式の居住様式が強固に存続していたために、洋服という新しい衣服の導入が、職場服や作業服にとまっていたことを指摘する。また、第4章「住居と生活」(宮本馨太郎)では、従来の木造住宅が、江戸時代の小住宅が幕府による統制によるものであることを説き、人びとの住宅様式は、日本の気候に適した木造の伝統的な様式から離れることができなかつたとする。明治時代に入った洋式の建築は、新しい集団生活である学校、軍隊、官庁などの職場を中心にしたものであり、そこで得た新しい生活の様式が、しだいに生活のなかへ、家庭へと持ち込まれていったとする。人びとは、和服と洋服の二重生活をかかえつつ、洋服や毛織りものの普及にともなう、それまで、虫干しを中心とした和服のしまいかたから、防虫などの樟脳などを入れる生活習慣へと変わ

ったとする。

渋沢は、柳田が述べることのなかった新しい制度、学校、軍隊、官庁から生活のあり方が変わっていく様相を捉え、明治において政府が「たんに西洋文化の模倣・移植というだけでなく、その進んだ科学的技術とその基礎的原理を学習する制度・組織をも、その文化様式と共にうけ入れて、国の制度としてその発達普及を図った」と考え、それが、「母胎たる西洋文化をより一層深く摂取してゆく過程ともなった」とし、「文化はもちろん国民や民族と結び」つくものだが、「それはたえず国際的交流の中に置かれて、絶えざる成長をとげ」⁽¹⁷⁾ るとした。

その時、こうした新風の受け入れにあたって、第3章「飯食と生活」（宮本常一）では「教育や書籍で得た知識は具体性に乏しい。それが具体的になるには実物にふれねばならぬ。新しい飲食文化の地方浸透も地方の人が都市に出て、それに実際に接することに始まった」⁽¹⁸⁾ とし、学校や軍隊の影響だけでなく、鉄道の発達による飛躍的な交通の増進がこれを後押ししたとする。旅を一生の糧とした渋沢敬三にとって、明治に入ってから汽車の発達、人びとの移動、交通の進展は、実感でもあったろう。

しかし、同じように、民俗探訪の旅をよくした柳田は、『世相篇』第6章「新交通と文化輸送者」で、村から都市へと旅をする人びとを見ながら、かつての村から村へと渡り歩いた漂泊者の面影へと想像をめぐらす。「中世以後彼等の大部分は聖の名を冒して、宗教によつて比較的楽な旅をして見ようとしたが、実際は他の半面は工であり、又商であつた。（略）もう彼是一千年にもなろうが、其間始終何かかゝ新しい事を、持つて来て吹き込んだ感化は大きかつた。（略）日本の文化の次々の展開は、一部の風来坊に負ふ所多」⁽¹⁹⁾ いと、柳田は風景の底にみえる歴史の厚みに眼をこらすのである。

9 モノとコトバ

『明治大正史 世相篇』と『明治文化史 風俗編』とを比較すると、その章の題に変わりはあるが、内容的にはほぼ重なることが分かる。しかしながら、『風俗編』第14章「言語生活」は、『世相篇』と重ならない、新たに書き加えられた項目である。そこで、柳田は、文化の持続ではなく、珍しく変化の問題に触れている。「明治維新以後の五十年間は、日本の国語は特にはげしい変化をしているが、世間ではこれに注意もせず、歴史としてみる習慣もついていない。そして現在に至っても国語の変遷に気づかずにいるといつてよろしい」と述べ、常民文化の変化の波頭に言葉が位置していると、人びとに注意を促している。

そして、言葉の変遷の原因について、3つの要因をあげ、(1) 社会の変遷の影響、(2) 国語全体が変わりやすい傾向がある、(3) 国語教育において、子どもが初めてコトバを学ぶ相手である親や家庭の長者の存在が無視されていることをあげている。ここで柳田は、家における火の管理と同じように、言葉の管理も母である女性に見いだしている。⁽²⁰⁾ この時、柳田の言葉への危機感、戦後に入ってから急激な社会の変化であり、家の解体、母親の役割の変化があったといつてよい。

ところで、柳田が言葉の問題に正面から取り組んだのは1930年の『蝸牛考』であるが、そこで、各地のカタツムリの呼び名の方言分布を比較検討して、言葉が近畿から他の地域へと伝播していったことを明らかにし、コトバは文化の中心地から、いくつかの円を描く

ように周辺へと伝播し、中心から遠く離れた地域ほど古い言葉が残っているとした。⁽²¹⁾ いわゆる方言圏論であるが、その考えの前提には、日本を稲作に基礎をおく単一の民族として捉え、コトバの変遷たる地域差を系統の相違として捉えるのではなく、一つの変化の過程の各段階が残存しているとするビジョン、構想力が底にある。その構想力、確信を支える論理、あるいは前提とは、一つの言葉、国語たる日本語の存在である。柳田は、自らの民俗学の基底に、コトバを置く。コトバを通して、時間の変化、人びとの歴史意識をみようとしている。つまり、単一の言語、日本語の範囲を自らの領域とするという前提である。

しかしながら、魚名を集覧した渋沢は、こうした構想力とは重ならないだけでなく、プラクティカルである。魚名の違いについて、幾つかの社会的要因あげつつ、「我が国民にとつて殆ど凡ての魚族が食料になり得ると云うことは先ず念頭におかなければならぬ」とし、「有毒なフグも食べるし、千葉県ではあの何の肉もなさそうなハコフグさへ食べる。また魚類は単に肉蛋白質をわれわれに供給するのみならず更に農耕植物へ魚肥としてその豊凶を左右する重要な役割を古くから擔当して居たのである。そこで、魚類自体が一般民衆に対し有する各々の経済的価値の度合い如何が自ずから魚名通用力の優劣に至大の關係を持つことになるのである。けだし一言にしていえば、いわゆる商品的価値高き魚の魚名は優勢となり、低き魚の名は劣勢となる」⁽²²⁾ とする。

つまり、魚というモノからみれば、一つの魚がいくつもの名前を持ちつつも、さまざまな流通、経済性によって、その場所での名前が決定する。実際に、名前が変わることで、あるいは言語が変わることで、魚が変わるわけではない。モノは、その本来の姿として、国境を越え、一つの言語を越え、交換され、使われ、時に食される。重要なのは、場のなかで、モノとコトバとの關係が変わることだ。渋沢にとって、コトバもまた、モノと同じように、交換の局面において、人と人とのコミュニケーションによって意味をもってくるものにすぎない。

社会の変化の相を捉えるのにあたって、渋沢敬三と柳田国男の研究の視角が違うこと、あるいは捉えたものに違いがあることは、あまりに自明である。そしてまた、その自明さを越えて、その二人が捉えたもの、提示されたビジョンがどちらも現実の姿であることも、また確かなのである。

注

- (1) 青木陸「日本実業史博物館全資料の概要と現状」『日本実業史博物館構想による産業経済コレクションの総合的調査研究』2006年
- (2) 小松賢司「『一つの提案』—澁澤敬三の博物館構想分析の前提として—」『日本実業史博物館構想による産業経済コレクションの総合的調査研究』2006年
- (3) 小松賢司「『購入品原簿』—コレクション形成過程分析の前提として—」『日本実業史博物館構想による産業経済コレクションの総合的調査研究』2006年
- 郷間大輝「『準備室日記』」『日本実業史博物館構想による産業経済コレクションの総合的調査研究』2006年
- (4) 渋沢敬三「『豆州内浦漁民史料』序」『澁澤敬三著作集』第一巻、平凡社、1992年、577頁
- (5) 渋沢敬三「所感」『澁澤敬三著作集』第一巻、平凡社、1992年、618頁
- (6) 原田健一「渋沢篤二、渋沢敬三、宮本馨太郎による映像の生成と關係性をめぐって」『映像民俗学』7号、2010年（掲載予定）

- (7) 渋沢敬三編『明治文化史 第11巻 社会・経済編』洋々社、1955年、第10章参照
- (8) 青木睦「幻の日本実業史博物館紹介—実業史の中の紙—」『幻の博物館の「紙」——日本実業史博物館旧蔵コレクション展』国文学研究資料館、2007年
- (9) 広瀬辰五郎『江戸の千代紙 いせ辰三代』徳間書店、1977年、182~183頁
- (10) 広瀬辰五郎『江戸絵噺 いせ辰十二ヶ月』徳間書店、1978年、177~185頁
- (11) 渋沢敬三「後記」『明治文化史 第11巻 社会・経済編』洋々社、1955年、608頁
- (12) 渋沢敬三「後記」『明治文化史 第12巻 生活編』洋々社、1955年、745頁
- (13) 渋沢敬三「『日本漁民事蹟略』」『澁澤敬三著作集』第三巻、347頁
- (14) 柳田国男「総説」『明治文化史 第13巻 風俗編』洋々社、1954年、5頁
- (15) 柳田国男「後記」『明治文化史 第13巻 風俗編』洋々社、1954年、589頁
- (16) 渋沢敬三編「第2章衣服と生活」(遠藤武)『生活編』15~16頁
- (17) 柳田国男『明治大正史 世相篇』『柳田国男全集 第五巻』筑摩書房、1998年、352頁
- (18) 渋沢敬三編「第3章飯食と生活」(宮本常一)『生活編』194頁
- (19) 柳田国男『明治大正史 世相篇』471頁
- (20) 柳田国男「言語生活」『明治文化史 第13巻 風俗編』洋々社、1954年、489~490頁
- (21) 柳田国男『蝸牛考』『柳田国男全集 第五巻』筑摩書房、1998年
- (22) 渋沢敬三『日本魚名の研究』『澁澤敬三著作集』第二巻、平凡社、1992年、120頁